

山行報告書

京都田辺山友会

報告者 徳田幸子

山名	比良山 イン谷口	山行名	京都労山 雪上搬出訓練	
ルート	イン谷口でのビーコン探査、1ルンゼ出合いよりの搬出・引き下ろし訓練			
山行日	2013年2月3日	天候	晴れ	
参加者	京都労山会員：約60名 京都田辺山友会からの参加 3名：中島 佐坂 徳田			
ルート概略図 第一ルンゼ (梱包訓練) 搬出 ビーコン・プローブ訓練 (トイレ前) ◆ イン谷口	コースタイム			
	地名	時：分	地名	時：分
イン谷口	集	8:30		
ビーコン プローブで の搜索訓練	始	9:15		
	終	11:30		
搬出訓練	始	12:30		
	終	15:00		
反省会	始	15:10		
	終	16:00		

山行報告

京都労山「救助隊雪上搬出訓練」に2回目の参加をする。

集合場所のイン谷口トイレ前広場には全く雪が無い。挨拶・スケジュールが説明されて3班に分かれる。 1班—アナログ 2班—デジタル 3班—アナログチェック

雪のある所まで上に登りビーコン・プローブの搜索訓練を行う。

ビーコンのアナログとデジタルの違い。

雪山に行くときは必ずビーコンを体につけておく。山に入ると同時にスイッチを入れる（発信モードとなる。） 捜査をするときはSE（探索=受信モード=SEarch）に切替えると遭難者が装着しているビーコンの電波（発信モード）を感知する。

搜索時の使い勝手から言うと、

アナログは、電波の強さをそのまま音で表現するので、音の強くなる方向に進んで搜索します。ある程度の習熟が必要です。

デジタルは、解析した結果を方向と距離で表現するのでそれに従って進んで搜索します。練習が不要ではないが、アナログに比べて搜索が簡単です。

プローブは、雪崩の危険がありそうな雪山では必須のグッズです。ゾンデ（独語）とも呼ばれます。これだけもっていても意味がなく、**ビーコン**で埋没者を探して**プローブ**で雪を突き刺して埋没者を探し、場所が特定できたら**スコップ**で掘り出します。この3品を雪山で命を救う**三種の神器**と呼んだりします。

「本格的に雪山に行くなら必ず必要になります」との説明を受けて訓練をする。

終了後1ルンゼまで登り昼食となる。

12:30から梱包の説明後5班に分かれて怪我人をロングテープ、カラビナ等を使い全身をシートで包み込む。

私の班は梱包のシートが小さく2枚を重ねているため、途中でずれて何度か直す。

昨年はブルーシートの為カラビナが外れ何度も直す。(実際の時にはツェルトを使用する)

今年は雪が少なく、無い所は雪をかき集める作業があった。(岩、石が見えている)

私の班は女性ばかりでしたが、どうにか無事に搬出者を引き下ろせました。

各班で反省会をし、全体でのまとめをして解散になりました。

今年は2回目なので少し余裕がありました。

山友会の皆さま機会があるときには参加をされると勉強になると思います。

ヒヤリハット ありません



感想文

佐坂 茂美

昨年は「登山学校」の受講生としての参加でしたが、今年は山友会の会員として中島さんと共に参加しました。60名以上の参加者の中に学校の同期生や講師の方々の顔も見受けられ、昨年程の緊張感もなく受講出来ました。



ビーコン、プローブ(ゾンデ棒)を使った埋没者の探査訓練では私は会のビーコンを持参しており、“デジタル班”に配属し、講師からビーコンチェックの担当を仰せつかりましたが補助のみとさせて頂きました。

ビーコンチェックとは一人はビーコンを受信モードにしておき、その前を発信モードにしてある参加者が一人ずつ通り抜け発信モードになっているかどうかのチェックです。発信モードになっておれば、デジタルビーコンの場合、距離と方向(○点で表示)が表示されます。

雪のある場所まで移動すると講師が持っているビーコンを発信モードにして雪の下に隠します。

受講生はビーコンを受信モード(探査モード=SE)に切替え画面上の方向を見定め雪の下に埋もれたビーコン(遭難者が装着している)の方向へ歩きます。隠されたビーコンに近づくと当然の事ながら、距離数は小さくなってゆきます。これを2~3度繰り返しました。(埋没者の位置確認)

次にプローブでの訓練です。

横一列に並び、リーダーの「右」、「左」の掛け声に合わせて「右足前」、「左足前」に鉛直方向にプローブを落



とし、プローブを握りしゃがみ込みながら、雪中に差し込んでゆきます。プローブの先に何の感触も無ければ、30cm程度前進し、同じ作業を繰り返し埋没者を探します。

誰かが「プローブは強く差し込め、埋没者が少し位負傷しても死ぬよりはまし」と言っていました。

片隅で雪を盛り、その中にザックを入れたり足を入れプローブの先端が当たる感触を確かめている講師や受講生もいました。こうして、ビーコンで探し、プローブで探す訓練は終了しました。



次の課程は遭難者の梱包、引き下し訓練です。

第一ルンゼまで移動し(積雪はあってもアイゼンは履きません)、昼食。



梱包・引き下しのグループ編成では幸いなことに私は山友会の中島さんや「学校」の校長(田原理事長)や講師(奥西さん)と同じ班に入りました。被梱包者に理事長が名乗りを挙げました。梱包にはロープ(50m)、カラビナ、シュリング、スコップ等を使い、結索方法としてインクノット、エイトフィギュア(8の字)ノット、それに今回はガースノットも使っていました。50mロープでは確保用に「流動分散」の方法も再確認しました。埋没者の梱包が終わるといよいよ引き下しです。最初から急な坂道を選び、そのルートでの引き下しです。中島さんがカラビナ、シュリング、ATCを使い確保、梱包者のサイドに6人がシュリングを握り、前にはスコップを持った人がルート工作(雪の少ない箇所では被梱包者に衝撃を与えない世に雪を積みあげて行きます。途中では「確保」したり、岩、石のある場所ではサイドの6人が引き上げたりしながらどうにか無事(?)に引き下せました。(搬出完了)。

開梱後、班毎に一人ずつの感想の発表です。「ああすればよかった」、「こうしたらどうだろう」との提案もありました。これらの感想、提案は次回の訓練時に活かされます。

山友会でも教育部でのハイキングセミナーが毎年実施されます。セミナー(座学、実技)終了後に、このような「反省会」を設け次のセミナー時に活かしたらどうでしょうか？

班毎の反省会終了後、全員が集まり各グループのリーダーの報告です。「私の班ではこんな意見がありました」云々。私自身、雪山で遭難した人を捜査に行くようなことは夢想だにしておりませんが、積雪期の搬出訓練に参加することで、無雪期の山行に役立つことが多々ある事を感じました。次の無雪期、積雪期の搬出訓練にはもっと多くの山友会会員の参加がある事を切望します。

